



イキ脳研

催眠CG集

授業が始まった少し後、教室のドアが開く。
「また遅刻とは、これは罰が必要だな」
講師らしき男は言った。
「まずはこの塾の入室の掟、覚えてるよな」
「はい……」
少女は自分のスカートの端を掴み、ゆつくりと持ち上げる。
「ふむ。では続いて、罰として……そうだな、今回はくすぐり刑だ。
服を脱いで下着だけになりなさい」





服を脱いだ少女に、教室の女の子たちが
近寄り、両手を縛る。

「やってしまいなさい」

女子達の無邪気な攻めが始まる。

「あははは、ちよつ……」とは手加減、はは

はっ、してよおっ……」

「チコクする方が悪いんだよ」ほらコチヨ

コチヨコチヨ」

もちろんだがこれは撮影をしている。

「今日の最初の授業は、フェラチオ実習だ。みんな、2人。ペアを作り、全裸になってこちらへ」

女子達はその言葉通りになる。

男も全裸になり、教室には服を着ている者がいなくなる。

「ん……んむっ」

「んん、ひもひいいふか？」

「もつと裏側を、舌で撫でるようにする」とい。及第点といったところだ」

「んむう、せんせえそればっかり」

少女たちは皆、虚ろな目をしてい。男による催眠だ。

教室で起こることは男が支配し、授業が終わり少女たちが施設から退出すると、彼女らの記憶から完全に出来事が消えてしまう。

そういう暗示なのだ。

「さて次の授業は、オナニーだ。休み時間が終わったら、ズボンやスカートを脱いで教室で待機していること」



「オナニーの授業が始まった。
「んっ、んっ……えへ、きもちいいよせんせー」
「そうですか。君は指を入れるのが良いみたいだね」
「うんっ、これが一番好きー!」
「みんなも各自自分好みのオナニー方法を編み出すと良い」
「はいー!」



素股の授業。少女はプレイ用のスクール水着を着る。
彼女が学校の授業で使っているものは色気がなかったからだ。
「ふとももで、チ●コを撫で上げるようにするのだ」
「えへ、これあたしにおち●ち●が生えたみたいだねーっ!」
「良いことを言う。先生ムラムラしてきたから特別にア●ル実習といこうか」
「わーい、あたしどんどんえっちになっちゃう♪」



男の濁流のようなピストン
で、少女のア●ルはメリメリ
と広がってしまった。
しかしその痛みさえも、催
眠によつて快楽と化す。
「あひや、せんせつ、ひやああ
あ……」
「無理にしゃべらなくていい。
今日の授業はここまでだ」



塾生には、家庭の事を細かく講師の男に伝えるよう暗示を掛けている。

ある塾生の父親が、この「塾」に疑いを持つているらしいということを知った。

娘の記憶が飛ぶことがあると見抜いたそうだ。

仕方なく、男は塾生を間接的に遣い、その父親に催眠を掛け、塾に来させた。

面談室には少女とその父親、そして講師の男の3人だけである。

ただし少女は服を一切着ていない。



「お前! どういうことだこれは!」
少女の親は講師に殴りかかるうとした
が、体が動かないことに気付く。
「催眠ですよ。成績に関しては催眠による
超集中勉強で確保し、更に、性的にも成
長して頂くというのが私どもの方針で
してね」
「わなわなと震える親の一方、娘は微笑
みながらセクシーポーズを取っている。
「お子さんも中々に優秀ですね。フェラ
チオがまた上手いんですよ。そうだ、本
日はそのテクニクを体験して頂きまし
ょうか。きつと納得して頂けることかと」



男が指をならすと、少女は親の服を脱がし、足元にしゃがみ込む。
そして悔しくも膨張してしまったモノをちいさな口で咥え込んでしまう。
少女は視線を上げ、リアクションを観察する。
「ああ、しっかり撮影して差し上げますので、安心していいですよ」
「やめろっ……やめさせてくれっ!こんなことをしたら、俺は、こいつはっ!」
「うむ、ではフェラチオはそこまでだ」
少女は口を離し、男は安心した表情。しかしその腰には情けないほど
熱く大きくなってしまったモノが。
「フェラチオはそこまでで、次はいよいよセ●クスだ」
男の表情はみるみる青ざめていく。

講師は布団、枕を用意し、部屋に敷く。そして男に催眠を掛け、そこに仰向けになった娘を襲わせる。
「パパあ、あたし。パパたちのおかげでこんなに勉強もおセ●クスも上手になったよお！」

「ごめんなつ……俺の身体、あいつに勝手にされて……ごめんなあ……！」

講師はカメラを回し続ける。そして、男はヘコヘコと気持ちよさげに腰を動かし、ついに、出してはいけないものを子の中に放出してしまったのであった。



その次の日。教室の者たちは
「今日は特殊プレイの授業だ。二人ペアを作ってくれ」
新たに二人が入塾し、奇数になったので、一人余ってしまった。
「そうか、じゃあ君は私とだ。……さあみんな、互いに電気あんまをして
くれ」
言葉通りになった教室は、くすぐったさによる笑い声でにぎやかになる。





「先生、お手洗いに行つてきていいですか？」
「あ、あたしもー」
「いや、ここでするんだ、黒板の前に立つて」
「えー、先生えつちなあ」
「大丈夫、ここでお漏らしをすると、オナニーより気持ちよくなる」
「やがて少女たちのパンツが勢いよく湿り、尿が登場する。」
「ああーすごいっ、これっ、きもちーよ先生！」
「くせになつちやつたら大変だよ♡」

騎乗位の練習。
「いいぞ、そう、腰をねじってみたり、ゆっくり動いたり色々試し、
相手のリアクションを見ながら互いに気持ちいいモーションを見出すんだ。」
「んっ……はいっ、勉強になりますっ……」



彼女らは無事に志望の私立学校に合格した。
早速、塾は彼女らの「祝賀会」を催した。
ピカピカの制服はもう汗と精液でベタベタのギトギトになってしまった……。
塾長には仕事が残っている。彼女らの記憶を関わることだ――

































